
約束と滅びの予言

クフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束と滅びの予言

【Zコード】

Z9267L

【作者名】

クフイ

【あらすじ】

魔女は、笑う。

『あれは、“想い”ではない、“呪い”なのだ。』

いつが始まりだつたるうか。
人々は、言つ。

力を求めて『異世界』から『異世界の者』を在を“召喚師”と。“召喚獣”を呼ぶ存

“召喚獣”を呼び、文明を伸ばしてきた世界“イクティニアス”。

“召喚獣”と呼ばれる者たちは、巨大な力を持ち人々に恐れられ、迫害される。そして、彼らは“召喚師”と“契約”を結ばれる。元の世界には戻れず、この世界に縛り付けられる“呪い”を。

人里離れた森の奥深くに住む母娘がいた。

“召喚獣”的一人、サラに育てられた娘、ルナ。

彼女は最近夢を見ていた。懐かしい夢を。

だが、その日だけは違つた。

ほんの些細な出来事が、世界を真実を知るきっかけになるとは、誰も気づきはしなかった。

夢の始まり（前書き）

初めてなので、文章がおかしいかもしません。
誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

夢の始まり

最近、よく夢を見る。

ぼんやりしていてあまり見えないけど、とても懐かしい気持ちになる感じの夢だ。

夢の道筋は、大体いつも同じ。

私は、ただその場に立っていて目の前に見える2人分の影に笑いかけている。その人たちも笑って、私を呼びかける、とそんな夢だ。

たつたそれだけなんだけど、私の心は凄く満たされるのだ。

でも、今日は違った。

いつもと同じ空間にいた。だけど、いつも見える2人の姿がない。代わりに帽子を被った人が立っている。帽子は、物語に出てくる魔女が被っている三角帽子の形をしている。体格を見てもその小柄のものは、女性だろう。

だとしたら、この人は魔女なんだらうか？

『正解』

『つー』

喋らないと思っていた。でも、声の高さで間違いなく女性だと分かった。クスクスと笑っているのが分かる。私が、困惑しているのが面白いか、元々からかうことが好きなのか、多分後者だと思うけど。

『へえ、私の性格は覚えてるのね。それともおなじみの力のせいかな？』

『つー……つー?』

一瞬彼女が言つたことが、よく分からなかつた。私は彼女を知つて
いるかのような口調だ。見覚えもない、増してや姿も分からない。
不信に思つた私は、問いただそうと思つた。

だけど、声が出なかつた。口は開くことは出来たけど、魚が餌を食
べるときみたいにパクパクするだけだ。

『ああ、多分喋れないと思つわよ。こゝは、あなたの“中”だけど、
支配してるのは私だから。』

彼女は普通に話してきたけど、それって私にとっては聞き流せない内容だと思うんだけど。私の“中”なのに何故彼女は、支配していると言つんだひつ。

『あひ、やっぱり全然覚えないのね。悲しいわ。』

『……』

『別に気にしないわ。だって、それが“当たり前”なんだもの。』

笑っている、ようこ思える声色は、何だか哀れみも含んでいいくつに思えた。

私がじつとしていると、彼女が近付いてきた。

私の直ぐ手前で彼女は止まつた。直ぐ近くにいるのにやっぱり私には、ただのぼんやりとした影にしか見えなかつた。

少しの間、沈黙した。

私は喋れないから、どうしようもない。彼女が一方的に話しかけるのを待つしかないのだが、この空気が何だか嫌だった。

しばらく経つて、彼女は口を開いた。

『…悲しい娘。』

『“運命”に操られ、未来を見出しができない。』

『裏切られ、傷つけられ、憎まれても、』

『そこに居続け、待ち続けているのね。“かの者”たちを。』

心が、痛かった。

彼女の言葉には、沢山の重みがあった。身に覚えない、感情が身体の中から溢れているようだった。知らないはずなのに。

いや、私は、

：私は、知っている？

『忠告してあげるわ。あなたが、毎晩見てこられる事についでよ。』

『穏やかに見えるものだけぞ、実際は違うわ。あなたの心を知つておいたもの。』

私の足元は、崩れた。

それを、聞いた瞬間

『あれは、

“想い”ではない、

“呪い”だ。

』

やわらか（前書き）

初めてなので、文章がおかしいかもしません。
誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

月によつて不気味に照らされた森の中の話。
森の最初の、物語。

「いたかつ！？」

「いや、…だかあの怪我だ。遠くには、そう行けやしない。」

「油断するな！相手は、腐つても“召喚獣”だ！！」

月の光が、夜を美しく照らしている。

しかし、森はざわめいている。それは、珍しい客人を招いているせいかもしれない。

数人の男たちは、夜になり不気味に変わり果ててしまつた森をさまよい歩いている。ある、一つの目的の為に。

「
.....」

数人の男たちからそう離れていない所に、少年が息を潜めていた。男たちの様子を窺っている。

少年の肩や足には、切り傷が見られた。それは真新しく、月の光はその赤を静かにてらしていた。

「（ここまで、……か。）」

少年は、今の状況を思った。
助からない、と。

こちらは1人で、男たちは数人。仮に隙をつくり、逃げたしたとしても、男たちの誰かに矢によつて射抜かれるだろう、と。

少年は、木々の隙間から見える月をみた。不気味な月だつた。だが、少し暖かく満たしてくれるような月だ。

「勘弁してくれよ。……俺は、これ以上進みたくないぜ。」

「おい、口を慎め。“森”に嫌われるぞ。」

「まあ、一応、加護を持っているから大丈夫なハズだがな。」

“この”世界の人間は、言つ。この巨大な森を『樹海』と。

この森は、『帝国』といつ“この”世界で、一番大きい国の周辺にある。

見直に感じるはずの森には、人が恐れをなす要因があつた。

森は、招からざる客人には容赦はしない。

認めない客人は、方角を狂わされてしまうらしい。らしい、と言うのは少年もただ、仲間から聞いた話でしかないからだ。

入った最初は、方角通りに進んでいけるのだ。だが、歩いていくうちに森は客人を見続けている。

招くべき客なのか、と。

森は、意志を持ち、判断する。そして、有害で危険だと感じた客人に囁くらしい。

『ステイア』は、この世界の古い言葉で、『罪』という意味だ。何故囁くのかは分からぬ。だが、一つだけ言える。

囁きを聞いてしまつた者は、終わりだ。一度と森の外には出れなくなる。何ども何ども同じ場所を歩いているようになるのだ、と。そうなつて帰れた者はいないので、本当のことを分からぬらしいが。

誰一人、帰つたことがないのに人々が何故、このことを知つてゐるのか。

安心に歩ける方法もある、ということだ。

“加護”と呼ばれる物を持つていればの話だが。

だが、“加護”を持つてゐる人間も、森が招からざる客人だと判断されると、囁くらしい。

最初の話は、その状態になつた者たちが、人々に語つた話だ。

“加護”は帝国の軍人しか、持っていない。
何で造られているかは、分からぬ。ただ、貴重な物らしい。とい
うことだけだ。

ここまで思い出して、気付いた。

追いかけている男たちは、それを持っていた。

つまり、

奴らは、帝国の軍人だ、と。

「（つ……！氣づくのが、遅すぎた。格好からみて、ただの“ハンター”だと思ってたのにな……）」

軍人なら、悪すぎる。
何ていう連中たちにバレたんだ。

“召喚獣”だと。

少年は、笑つて思つた。
今日は、本当に運が悪い、と。

「見つけたぞーーー！」

「う…………ちう！」

「くそ、ちよこまかとつ……追えーーー！」

少年は走つた、せりめを続ける森の中を。男たちも少年を追つた。

その中の1人が銃を取り出した。

少年は月の光に照らされて黒く光つたそれを見逃さなかつた。

少年が体制を立て直そうとしたときだつた。

ドオオン

「……なつーー！」

銃声が鳴り響いた。

しかし、同時に少年の身体も傾いた。銃弾は、少年の肩を掠めただけだった。

少年の足元は、暗闇だつた。

そう、崖だったのだ。

少年は、肩に僅かの痛みを感じ、顔を歪めた。

男たちは、驚愕していた。銃を持った男は一瞬呆然としていたが、我に返り銃を再び握つたが、遅かつた。

少年は、崖の暗闇へと落ち、姿が見えなくなつた。

「…死んだか？」

「いや、分からん。少なくとも、軽傷ではすまんな」

「（）は、“樹海”だ。死んだと考えてもいいだろ？とにかく、帝都へ帰るぞ。」

男たちは崖に背を向け、森の入り口へと歩いていった。

森は、笑っていた。

森の母娘（前書き）

初めてなので、文章がおかしいかもしません。
誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

森の母娘

森は、待っている。

その者たちが帰ってくることを。

森は、知っている。

運命は、変えられないことを。

森は、覚えている。

昔も同じだったことを。

森には、朝の独特の静寂があった。朝日は、木々の葉によつて遮られ、大地まで満足には、照らしてくれない。

しかし、川は違つた。朝日によつて水面は光り、美しい朝の風景に思えた。

その川のほとりには、1つの影があつた。

「んー……こつもと変わらない、朝だな。」

女性だった。腰まで伸ばされた金髪は、時折吹く風によつて舞い、金糸のように見えなくもない。森には日があまり当たらないせいなのか、肌は白く、特に特徴的なのは、血のよつた紅い瞳だった。

女性は、バケツに水を汲み上げ、川のほとりから森に向かつて歩き出した。少し森に入ると、すぐに木でできた古ぼけた家があった。女性は、ドアの取っ手をとり、ドアを開けた。

「ルナ、朝だよー。起きて起きなー。」

いつもの朝と変わりなかつた。

「……うつ……眠い。」

「何言つてんだ、顔を洗つてさつやと起きな。」

「……そんなこと、分かつてるよ。……サラ。」

女性 サラによつてルナが被つていた布団は剥ぎ取られ、ルナは泣

々といった感じで、目をこすりながら起き上がつた。

ルナは、身だしなみを整えるため、鏡がある方へ向かつた。

黒い髪はそんなには乱れていないが、まとまりがなかつた。

「ほひ、綺麗な髪なんだ。ちやんとときな。」

「……ん。」

ルナは頷きながら、髪をとく櫛を動かしたが、まだ寝ぼけているようで、うまく櫛が通らない。

サラは、その様子に呆れて、ベットを整えるのを止め、鏡の前に座つているルナに向かつた。ルナの持つ櫛を取り、サラは髪をとかし

始めた。

サラは、この黒い髪が好きだ。闇のよつた魅力があり、美しさに引き込まれるような感じがする。
しかし、一番は“故郷”を思い出す。自分はまだ、“故郷”を忘れないでいると思った。

「？……サラ、どうしたの？」

「あっ……いや、何でもない。」

考え事をしていたせいか、櫛が止まってしまっていた。ルナは、不思議に思ったのだと思う、大きな目で自分を見上げていた。
ルナの瞳は、満月のように光る金色だった。黒い髪に金色の瞳、ルナの名前の由来でもある。“ルナ”は、“この”世界の言葉で意味は“月”。

ずっと止まっていたので、流石のルナも眉を顰めて私を見ていたの
気付いた。

私は笑い、ごまかした。櫛を持つ手を動かし始めた。

「サラ、どうしたの？」

「いや、相変わらず綺麗だと思ってね。」

サラは、ただ悲しく笑っていた。

サラと一緒に朝食を取り、いつものように木の実を拾いに森の奥へ私は、向かつた。

サラは、偶に髪をとかすと今朝のようになる。帰ることが出来ない“故郷”を思い出すらしい。私は小さい頃に理由を尋ねた。サラは、笑いながら言ったのを今でも覚えている。私と同じ色を持った知り合いがいるのだ、と耐えるように目を細めて言つた。

小さい私は、その様子を敏感に感じた。
大切な人だったんだ、と。

サラは、捨て子の赤ん坊だった私を育ててくれた母だ。物心ついた頃には“召喚獣”だということを話してくれて、人里離れた森に住んでいても、“召喚獣”的な扱われ方も知っている。

しかし、1つ分からないことがある。

サラは、やけに“召喚師”が使う術　『召喚術』について詳しかった。

“召喚師”的元で助手でもしていたのか分からぬけど、サラは実際に“召喚術”を使って見せた。その時呼んだのは、無機物のもので、固くて四角い箱をしていた。

サラが言うには、“テレビ”という異世界では、情報知る上に使うものらしい。“テレビ”がある世界にいたのか、と聞いたが、答えは否。サラの世界には、そんな便利なものはないらしい。

異世界について詳しいサラの話は、魅力的だった。“召喚獣”を呼んで他の世界についても聞きたい、そう思つた自分がいて、少し嫌になつてしまつた。

サラが言うには、“召喚師”は知識と魔力があれば、簡単になれそうだ。しかし、“召喚術”は国家的にも強大な力だから、そんなに使える人がいたら混乱を招く。

そこで、世界の大國の3つは、“召喚術”を使うことが出来る大きな4つの一族を作り上げ、その一族しか“召喚術”についての知識を与えたらしい。所謂、情報操作だ。

一族から“召喚術”的術を教えて貰えるのは、軍人や貴族ぐらいだ。魔法学校があるらしいけど、一般人には、とても払えない学費らしい。

しかしながら、サラはとてもなくスバルタだった。
そこまでしないと、知ることが出来ない“召喚術”を私はサラに教えて貰っている。偶に行く街で、術に関する本を読み漁り、実戦している。

私が、“召喚術”についての本を理解していると分かつた瞬間から、教えられた。サラ曰わく、私には『才能』というのがあるらしい。

「それでも、あれのスバルタは勘弁して欲しいな。」

はあ、とため息をついた。

そして、いつもよう木の実の場所に行くための橋を渡りうつとしたときだった。

「えつ……あれって……」

川の岸に何か黒いものが見えた。
遠くで見た感じでは、ただの塊にしか見えなかつた。
しかし、所々赤いものがみえた。

私は、目を疑つた。

そして間違いない、と思った。

それは血で塊は、『人』だということを

私は迷わず、その方へ走つた。

その人に駆け寄り、傷の様子を見た。

ただ、転けたりしただけではこんな傷はできない。
つまり、この人は誰かに襲われたんだと分かった。

私は、持っていた布を水で濡らし、傷口にあてた。でも、ここでは満足がいく治療が出来ない。

私は、サラを呼んでくることにした。この人を家に運ぶためだ。

「待つてーー！すぐに助けるから！」

私は、ひたすらに走った。

右端と累積のH?（前書き）

初めてなので、文章がおかしいかもしません。
誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

召喚師と異界の王？

昔、昔

世界『イクティアス』は、異世界の『魔王』によつて支配されました。

人々は、魔王を恐れ、異世界の者たちによつて虐げられていました。

魔王は強い力を持つており、誰も魔王を倒そつと考へる者はいませんでした。

しかし、その魔王に立ち向かつた2人がいました。

1人は、のちに『世界一の召喚師』。

もう1人は、その召喚師と契約をした『異世界の王』でした。

しかし、2人は最初から契約をしていたというわけではありませんでした。

世界が魔王の侵攻が強くなり始めた頃でした。最初のうちは、人々も抵抗していました。

しかし、しだいに人々は恐怖に陥り、もはや成す術もなく、このまま世界が終わるのを静かに待つことしかしなくなりました。

ある日のことでした。とある小さな村の少年が、『魔法使い』になりました。

しかし、この時代では魔法使いになることは命知らずの証でもありました。

少年は言いました。

『みんなで立ち向かえば、魔王に勝てるはずだ！』

人々は少年を『愚か者』だといいました。しだいに少年を避けました。

しかし少年は、諦めませんでした。

少年は来る日も来る日も探し続けました。魔王を倒す方法を

そしてついに少年は見つけました。

当時、禁忌だと言われた【召喚術】を使い、少年は『召喚師』となりました。

召喚師となつた少年は、異世界の王に呼びかけました。

『王よ、どうか私に力を貸してください。』

王は、はじめは何も答えませんでした。

しかし、召喚師は諦めずに呼びかけ続けていました。

王は、憲りない召喚師に向かつて問いかけました。

『異界の人間よ、何故そこまでして力を望む？人はお前に何をした？お前を避け、虜げた奴らに何故、そこまでする？』

少年は、王にいました。

『確かに人々は私を避けました。しかしだからといって、そのせいで私が人々を嫌う理由にはなりません。私は、人々の話ではなく、この世界が好きだから。守りたいから、力を貸して欲しいのです。』

王は、その答えに笑い声をあげました。大地を揺るがすような大声を上げて

『面白い、人間。“世界を愛している”、と。慈悲深い答えた、気に入った。私は、そう答えた御主の姿を最後まで見たくなつたぞ。』

王は、異界から姿を見せ、少年の前に現れました。

『人間、汝の名を。問え。』

これが、『召喚師』と『異界の王』のはじまりでした。

田原の（前書き）

誤字脱字のありましたら、教えてください。

田覚え

「一体、これはどういって何だい、ルナ？」

「えーっと……どこから説明したらいいのか……。」

川の岸に倒れていた少年をサラと一緒に何とか、家まで運んだのは良かつたのだけれども。

サラは、ものすごく怒っている。厄介なものを運んできやがって、と口では言わないけど、田で語っている。

怖い、怖すぎる。後ろに薄ら鬼が立っているのが、見えなくもないような気がしてたまらない。

「人助けはいいことだ、ルナ。でも、これは場合が違うぞ。」

「？ 何で？」

「この男は、『召喚獣』だ。」

「……」

サラに言われて、よく見てみた。けど、普通の少年にしか見えない。しかし、よく体の周りに纏っている魔力を感じた。この世界のもの

でない、『別の』世界の魔力を帯びている。

「まさか、全然気づかなかつた……。」

「私も最初は思つた。うまく紛れ込ましてゐる、この世界の人間とそ
う変わらないように。」

「そ、そなんだ。じゃあ、この子すうい力の持ち主なんじや……。
。」

「だから、まずいんだろ。この森は、人が奥まで来ないようになつ
てるんだ。こいつが自力で来たのなら、帰れるはずだ。帰るのは勝
手だが、よつはその後。」

「私たちのことと言つかもしれないって、『う』こと？」

サラは、無言で頷いた。確かにまずいかもしれない。
森は、招からざる客人には容赦はしない。だから、『帝国』やその
他の大きな国も手出しあしなかつた。

でも、ここで普通で暮らすことができたとしたら、話は別になつて
しまつ。

『帝国』は100年近く昔、この森を召喚術の実験場にしようとしたらしい。

当時の人々は森に入つたりしていなかつたので、この森のことはよ
く知らなかつた。

しかし、いざ実験を行おうとして森の中央に入つていけば、召喚師
たちは一人も戻らなかつた。それが、毎回続き、帝国はこれを不氣

味だと思った。何年かして、最近は『加護』といつものを作つたらしくて森の奥の手前まで入ることはできるよになつたらしいけど、奥までやつてこなかつた。

「ゞ、ゞゝゝよう・・・ツカラーハー」

「ゞゝしそうつて言われてもね。ほつとじても、後味が悪いからね。・・仕方がない。もしものときは、口封じをさせてもらひつよ。」

サラは、そういうながら家の奥に立つた。

サラは、呪喚術よりも『呪術』と呼ばれる術の方が、得意だ。それは、相手の精神を操つたりすることができるものらしいけど、サラはあまり好んで使つたりしなかつた。サラ曰く、『気持ちが悪いものだから。』らしい。さつき奥に行つたのも術の準備をするためだ。

はあ、とため息をついた私は、少年の顔を見た。

その子は、私と変わらないくらいの年齢っぽい。呪喚獣だからもうちょっと年をいつているかもしれない。顔は、整つてていると思つ。綺麗な顔をしている、女の私がちょっと嫉妬するほどに。髪は青っぽいような緑のような感じで不思議な色だつた。瞳の色は見ていなければ、多分同じぐらい不思議な色をしていると思つ。

私は、少年を見ながら、今朝の夢を思い出していた。
そういうえば、あの『魔女』さんは私のことを『悲しい娘』といつて

た。 実際考えてみたら私は、全然悲しい思いをしていないように思う。 サラを暮らしingして楽しいし、何一つ不自由はない。 今日みたいな慌ただしいことは初めてだけど、それ以外はいつもと一緒にだ。

「（私は何が・・・悲しいんだろう？）」

思いふけていた。そのときだつた。

ベットに横倒していた少年が、身動きをした。「うう・・・」とか、唸り声を上げていたから、意識はあるようだ。私は、少年の傍に駆け寄つた。

彼は、唸りながら眉を顰めて、目を開いた。とても綺麗な瞳だつた。吸い込まれるような森の翡翠色の瞳だつた。私は、その瞳を呆然と見ていた。彼は、驚いて目を見開いていた。それからどちらともなく呆然と私たちは、見詰め合つていた。

少年は、はつたとしたように私をにらみつけた瞬間、私の体は浮き上がつた。

「・・・つーーーー

「わやつーーー

私は胸ぐらをつかまれ、そのまま宙を舞い、彼が寝ていたベットに押さえつけられた。とてつもなく強い力だった。『召喚獣』の特有の力なのか。私は、少し抵抗したが、体を少しだけ動かしたが身動きがとれず、そのまま胸を押さえつけられた。彼は、目を細めて私を見ていた。そして、口を開いた。

「お前、あいつらの……軍人か？」

「ちが……つう……こは、も……り……『樹海』よ……」

「何だと……？」

質問に私は、苦しまぎれに答えた。

彼は疑つてゐるのか、私を取り抑えた腕は退けなかつた。辺りを見回して、考えるような素振りを見せていた。段々と、意識が遠のいていっているような気がした。私は、動かせる手で必死に彼の腕を叩いた。しかし、彼はそれを煩わしく思つたのか、さらに力を込められてますます苦しくなつた。

喉は、息をするたびにヒュウヒュウしているのが分かつた。呼吸ができなかつた。

「そんなことをしても、無駄だ。お前ら……この『世界』の人間は、卑劣な人間だ。」

「…………あつ……」

「弱いふりをしていながら、偉そうにする。そして、俺たち『異世界』の人間を奴隸のように扱う。」

「そんな人間の一部のお前を、許すか。」

「私の娘を殺すな！――！」

「・・・なつ！――」

彼の言葉は、重かつた。私に對してだけではなく、この『世界』の人間に對しての憎しみの声だった。怖かつた、私には何も言い返すことができなかつた。

異変を感じたサラが、この部屋にやつてきたようだつた。サラは、彼の首に打ち、氣を失わせた。力が弱まり、上に乗つっていた彼の体は私の上に落ちてきた。ちょっと苦しかつたけど、胸を押さえる力がなくなつたことで、私は思いつきり息を吸つた。

「・・・つはあ、はあ・・・」

「大丈夫かっ！？」

「だ・・・だい・・・じょうぶ。」

サラは、私の上から少年の体を退け、起こしてくれた。そして、力いっぱいに抱きしめた。苦しかつたけど、とても安心した。

やつじつ（前書き）

誤字脱字があれば、教えて下されると嬉しい限りです。

やりとつ

これは、憎しみの御話。

獣がいた、一匹の獣だ。

獣は、吠えた。1つの人影に向かって。

獣は、噛みついた。多くの影に向かって。

獣は、傷ついた。人影から出でてくる棒によつて。

影は、手を差し出した。獣に向かつて。

獣は、捕まれた。黒い手によつて。

黒い手は、空を舞つた。

“呪い”の始まりだった。

彼が襲いかかってきて、早1時間近くたつた。彼は、苦しそうな顔で眠つたままだ、どうやら傷は凄く深いみたいだった。それにしても、あれぐらい動けるとなると、回復は早いようと思つた。

サラは、腕を組み怖い顔で彼を見ている。ヤバいくらい怖い。鬼だ、鬼がいる。美人だから、さらに増してゐる。

私は何も言えない臆病者なので、私より身長が高いサラを見上げる事しかできない。

「そ、サラセーん？」

「ルナ、黙んな。何で襲われた当事者が、そんなんなんだ。危機感持ちな。」

「そんなこと言われても、彼がこの『世界』の人間を嫌うのは、当たり前だから……」

「そんなこと言つて言い訳ないだろ。ルナ、お前はコイツみたいな奴がまた襲つてきたらそつひとつもりか？奴らが付け上がるだけだ、何も変わらない。」

「召喚獣は、みんな世界を恨んでる。自分たちをそういう扱いをする世界をな。でも、もっとも恨んでいるのは、召喚師だ。」

「お前は、憎くて忌むべき世界の人間だ。しかも、“召喚師”だ。お前がやつてることは、『優しい』かもしれない。でもコイツにとっては、ただの『偽善』だ。」

「『優しさ』だけじゃ、何も救われないよ。」

サラが言つたことは理解しているつもりだ。何も変わらない、それが現実だ。

私は、世界を知らない。住んでいる世界だけど、何一つ知らない。
だけど『帝国』が、世界の軍事力を牛耳つていることは知っている
し、『聖王国』は召喚師の王によつて政治行われている。でも、召
喚獣の扱われ方はよく、知らない。国よつて扱われ方は、違う。見
世物だつたり、奴隸だつたりもする。
皮は、これよつもつと酷い扱いをされたかもしない。

・・・・・ 結局、私は彼らからしたら『子供』で、『偽善者』だ。サラは、彼の方に視線を向けていたが、それを私に戻した。そして、ため息をついた。

「まあ、私も同類だ。コイツの気持ちを言つた訳じゃない。」

• • • • • •

「マイシを今せじへりつせしないわ。最初はみんなそつだかりな」

そつだつたサラは、部屋を出て行つた。
ドアの音がパタンと鳴り、元々静けさがさらに増した。
彼が寝ていると分かる息の音しかしなくなつた。

私は、何となく彼の近くにはいたくなかったから、窓側にある椅子に座つた。相変わらず、森は日が当たらないがいつもと変わらない昼間の森だった。

「私つて単純なんだな……」

私は、自分を過信していたと思う。サラに最初彼が、“召喚獣”だと聞いたとき思っていた、『私なら大丈夫』だと。少し多可を括つてた。サラつていう召喚獣と暮らしているから、私たちやこの森のことを分かつてくれる、と。

実際は、違う。彼は、生きることに必死だ。彼からしてみれば、この『世界』の人間は、絶対的な“敵”だ。例えこんな風に召喚獣と暮らしていてもだ。

サラは、普通の召喚獣とは違つたところがある。この世界に詳しいし、召喚術に対しても知識がある。比較的、友好だ。だから、私といつ憎い世界の人間を育ててくれたのかも知れない。

「甘いなあ…ホントにダメだね。」

私は、ため息をついて空を眺めた。

悪く悪意（前書き）

誤字脱字があれば、教えて下さると嬉しい限りです。

蠹く悪意

帝国憲法第163条

『召喚獣』は、絶対服従を誓つべし。

帝国憲法第168条

『召喚獣』は、『人間』を尊重し、従つべし。

・・・・「シシ

「……反乱軍の様子は？」

「今は何とも言えませんが、直に襲撃してくる可能性があります。

広く長い廊下が続いている。歩いている二つの影は、傾き始めている夕陽によって細く長く伸びていた。

一步先を歩く影は、後の影よりも小さく細い。声の高さから女性だった。

「“樹海”に消えた奴は、どうなった？」

「はっ…それが、…」

「どうした？まさか、逃したのか？」

部下と思われる男が、言葉を濁らせていくと女性の声色は、少し低くなつた。

部下は慌てたが、すぐに落ち着き、様子を窺つよつて、女性を怒らせないように言った。

「申し上げにいくのですが、どうやら奴の方は、崖に落ちたらしく・

「遺体はなく、死んでるか生きているか分からぬ状態だと言ったいのか？」

「まっ・・・しかし、あの『樹海』です。生きてこむ可能性ま・・・」

ダンシ

「『樹海』だから死んでいるだと？笑わせるな、奴は『召喚獣』だ。」

「…………」

「…………次は、ないと思え。」

「はつ…………」

女性から放たれているのは、確かに殺氣だった。男性は黙り込み、そのままの状態で立つたままだ。

女性はその様子に気にする素振りを見せせず、男性を横目で見た後、また歩き出した。男性は、足音で気づき、すぐに後ろに着いた。

女性は、正面を向いたまま言つ。

「奴を探せ、『樹海』を隈なくだ。」

「はつ・・・しかし・・・」

「次はないと言った。何人の犠牲者を出してもかまわん、奴を探せ。」

「

「奴の能力は危険だ、『世界』に生かしておくにはいかない。」

「

そう言つて女性は、重く硬いドアを引き入つていった。部下はそれに敬礼をし、ため息をついた。

傾き始めた陽は、輝きを闇に囚われずにまだ深紅に光っている。

「…………了解しました。将軍。」

部下の重い一言は、廊下に響き渡った。

「失礼します。」

「…………遅いぞ、『將軍』。」

ドアの向こう　　『將軍』が入った先。

そこは重々しい空気が漂っていた。『將軍』が入つて正面には、
人の老人がいた。周囲にも何人かの男たちがいた。険しく、また『
將軍』を煩わしく見ていた。

『将軍』は視線に気にする事はない、その場に膝をつき、頭を下げた。

「『将軍』、よく来た。現状報告を聞こいではないか。」

「はい・・・反乱軍は、1週間前の暴動からは沈黙を保っています。別の件ではありますが、奴らの『リーダー』と思われる男が、『樹海』の方で行方知れずとなっています。」

「・・・・・して、その男はどうするつもりだ?」

「今晚からでもすぐに』樹海』に部隊を派遣するつもりです。その男を捕らえることができれば、反乱軍を完全に叩くことが可能かもしれません。」

「可能・・・か。絶対にそやつが反乱軍との関わりを持つているわけではないだろ?」

「いえ、その男は帝都にここ最近、滞在していた『召喚獣』です。少なくとも仲間の1人は、関わりがあるはずです。」

「まあ、『将軍』の勘はよくあたります。様子を見ましょ?」

『将軍』を幾度となく攻め続けていた周りは、仲介の声を聞き、話を止めた。仲介の声を上げた男性は、20代ぐらいの年齢のようでこの中では比較的若かつた。特徴的なのは、蒼い長い髪だった。男性は『将軍』を見、微笑んでいた。『将軍』は男の視線も周りの視線も気にしていないようで、ただ何も感じていないようで無表情のままだつた。しかし、そんな『将軍』の様子も気にしていないかのように蒼い髪の男性は、笑っていた。

そんな男の様子に周りは呆れかえっていた。『、また、始まつたか』という声も上がった。

「マックロンダー卿、いい加減その『プレイボーイ』っぷりを会議に持ち込まないでいただきたい。」

「申し訳ありません、ダラス大臣。『将軍』は何せ、美しい方ですから。」

「舐めているのか、青二才が。ここは、パーティーではない！』

「静肅に。まだ、話は終わっておらん。」

老人の声に周りは黙つた。そして、老人は『將軍』に視線を向けた。
『將軍』は、未だに頭を下げ、老人の言葉を待つた。

「『將軍』、今回の反乱軍の件。貴公に任せせる。軍をこゝへ使つても構わん。・・・・・何としても反乱軍を潰せ。この『帝国』に危険分子を一つ残すな。」

「はっ・・・了解しました、皇帝陛下。」

『將軍』は、会議でその時初めて頭を上げた。

異界の者たち（前書き）

遅くなりました。読んで下さると嬉しいです。

異界の者たち

『樹海』の夜は、暗くて怖い。不気味な感じが漂つ。

でも、酷く優しい感じがする。

そう、もう忘れた“故郷”の記憶の中に。

「へつ……」

目を覚ましたら、見知らぬ天井だった。木でできてい、その木を見てみると築何年か建つてているように思えた。体を起き上がらせると、全身が鈍い痛みが走った。特に肩の痛みは、一番強かつた。そういえば夢見が悪かつた。いきなり女が出て来て、しかもその女はこの世界の人間で思わず俺は、首を絞めたつていう夢だ。周りを見回した。どうやら、助けてくれた奴はいないようだった。

薄暗い室内は、窓から月の光が入ってきてようやく明るさを持つているようだ。

とつあえず俺は起き上がった。ここに長くいる訳にはいかない、“仲間”のところに帰らないとまずい。

酒場の人間が言っていたことが、本当ならなおむり

「うう…！？」

歩き出した瞬間、全身に痛みが走った。立つてこなことができなくなって、その場に倒れ込んだ。

思ったよりも傷は深かつたようだ。苦し紛れに息を零した。傷の中で最も酷いのは肩のようだつた、最後に軍の『人間』に撃たれた傷だ。

忌々しく感じた、縛られているようで。人間に犯されない、禁忌の森まで逃げてきたというのに未だに人間は俺に絡みつき離そうしないようだ。歯を食いしばり唸りながら、立ち上がった。どうやら

足は無事のようだ。

俺は、ドアノブに手をかけて扉を開けた。周りは薄暗く、どうやら住人は寝ているようだ。音を立てないように扉を閉めて、廊下を歩いた。家の中は、特に広くもなく狭くなく、普通の家だった。しばらく歩いていると玄関らしき扉を見つけ俺は、迷わずを開けた。扉の向こうには、不気味に光る木々が俺を見下していた。扉を音を立てずに閉め、周りを見渡した。ここ家の周りは木々が少ない様子から家を建てたときに意図的に伐ったのだと推測ができた。

『樹海』の木々は、怪しく音を鳴り響かせた。俺を森の奥に誘うかのようだ。

俺は、一歩ずつ歩き出した。森の意思に取り付かれたかのようだったが、俺は正気だった。歩き出すと木々は一層、音を鳴らした。本当に意思があるようで、半信半疑だった俺は、仲間の言っていたことは本当だということを信じるしかなかつた。だが、ここになつて不安が過ぎつた。『樹海』は、敵とみなした客に容赦はしないという話だ。逆に気に入つた客は無事に帰らせてくれるという話はあつたが、俄かには信じられなかつた。俺は、立ち止まつた。しかし、木々は俺の心を知つてか知らずか、不気味な音を鳴らし続ける。これは、賭けに出るしかないと俺は思つた。運に任せることは本意だが、自然には俺のような『召喚獣』も太刀打ちできない、それが『異世界』の自然でも。俺は手を握り締め、再び歩み始めた。

しばらく歩いていると、湖が見えた。昼の姿は美しいのだろうが、夜の姿は森の力を借りていいるせいか、恐ろしく思えた。だた、湖のちょうど真ん中に光つていてる月がなによりも救いだつた。

「美しいだろう？」

「？」

いきなり声が聞こえた。今まで森の不気味さに気を捕られていたため、近づいていた存在に気づかなかつた。声を聞こえたほうを見る
と、金色の髪を靡かせながた女が近づいてきた。俺はその様子にす
ばやく構えた。女は気にする様子もなく、湖のほうに近寄つた。そ
して、その場に座り湖の水を掬つた。

「安心しや、私はお前と同類だ。『竜』の民よ。」

「同じだつ……？…………お前も『龍』に囚われた口か。」

「…………そうだな。」

女の氣を辿つていいくと同郷とは違つが、この世界とは違つ臭いがした。・・・・・この臭いは、俺たちの世界のやつらが最も嫌つ臭いだ。煙臭く、鼻の中がむずむずする。そして一番キライとする、呪詛の臭いだ。

「・・・・・お前、ハレニアムの者か。」

「やつじつ貴様は、ヒューレイの奴だな。道理で、あの子が助けたときからきな臭くて仕方なかつたのか。」

「・・・・『あの子』とは、俺を助けた女ことか。」

「そうだ。助けてやつたというのに恩を仇で返しても、お前を見捨てなかつたこの『世界』の人間の娘だ。」

「・・・・・。」

そいつは、気持ちがいいぐらいの笑顔で平然と言つて退けてきた。流石、エレニアムの奴だ。相変わらず、俺たちと馬が合わないといふことが精々しいぐらい分かつた。仲間に再会したときは、気をつけるともう一度言つておこう。

女は、俺の様子を見た後にため息をついた。俺に対する呆れだとと思うが、むしろ俺を助けた女に対してついたと思つた。やはり、あれは夢ではなくて本当だったようだ。

「・・・あの子は、どうも甘いな。人に対して優しそうる、あれではいつか殺されてしまうな。お前のような奴によつて。」

「だつたら、言い聞かせればいいだろ？俺としてはなぜ『異界』の者が、この『世界』の人間と一緒にいるのかを聞きたいところだがな。」

「あの子は私が育てた。だから、分かる。あの子は人の話を聞く子じゃないさ。」

「・・・人間を育てた？何のためにだ。」

「おや、随分冷静だね。酷く当たつてくると思つたが。」

「気に食わないが、お前は頭がいいようだ。何か企んでいると思うほうが自然だと思つが？」

女は笑つた。・・・どうやら馬鹿にされていたようだ。ヒューレイの者は力で従えていくと思ったからだ、と言つた。確かに俺たちの

世界の奴らは大半がそういう奴らばかりだが、失礼だと思った。女は一頻り笑い、笑いが止まつた途端、口を開いた。その口元は、まだ三日月のような弧を描いていたが。どうやら、コイツも他のHレー／アムの奴らとは違い、話が分かるようだ。

「面白いな、久しぶりに退屈を感じないよ。」

「……どうこいつ意味だ？」

「お前自身も面白い奴だと思つてね。まあ、あの子を育てたのは何かを企んだわけじゃないさ。」

「……何がある？」

「哀れみさ。」

女は笑つた。

『彼』と私

朝日が差し込み、ベットにある膨らみはもぞもぞと動く。しかし、少し動いただけで終わり止まった。

窓の外では、いつものように木々たちが不気味な囁きを慣らしながら、『客人』を見ている。『客人』たちは、いつものように暮らしているようだ。

動かなくなっていた膨らみは、意を決したかのように飛び起きた。

「いけないー、いつものように寝てゐる場合じゃない。あの人のことを見なきやー。」

飛び起きたのは、ルナだった。ルナは、起きた後すぐに、髪を整えながら着替えを探していた。サラによつて整えられていた髪だが、いつもよりボサボサになつてしまつているよつだ。タンスの手前にあつたシンプルなワンピースを取ると、ルナはそれに着替えて身支度をして部屋を出た。

部屋を出た後は、あの少年が寝ている部屋へと向かつて歩いた。いつもならサラが起こしてくれるはずなのに今日は、なかつた。おかしい、と思いながら私は、部屋へと向かつた。

ドアノブを捻り、ドアを開けた。でも、見えるはずの姿がなかつた。辺りを見渡してもその姿はなくて、困つてしまつた。

「ど、どうしよう。サラ、もしかしてあの人に森の奥に捨ててきたとかじやないよね？」

「ほう、ルナの中の私はそんな血も涙ない奴になつているのか。肝に免じておこづか。」

「や、サラっ！」

後ろを振り向くと、張本人のサラが立っていた。もちろん、凄い笑顔を浮かべながら立っていた。

「怖い、どうしよう。今、命が危険に晒されているような気がして堪らない。この笑顔の時のサラは、怖くて仕方がない。

と、兎に角、あの人のことを聞かないといつ！

「サラ、あの人はどうしたの？」

「さあ、どうしたのかね。私は、血も涙ない冷血野郎だからね？」

「うう……」

良過ぎる笑顔だ。怒っている訳じゃないけど、遊んでる。私の反応で遊んでる。視線を反らしながらどうしようかと考える。こうなつた以上、嫌というほどこゝり絞られてしまう可能性が高い。そして、嫌味を言った後には確実に今日一日分の掃除やら洗濯などを押し付けられてしまう。それぐらい、サラはとことん追い詰める質だ。本当に意地が悪すぎると思う。

私がどうしようかと迷つていると、後ろから黒い影が見えた。その黒い影は何やら迷つているようで私の前に姿を現さない。私が後ろばかりを見ていることに気がついたサラは、振り返った。影を見て溜め息をついている。サラは、迷うことなく影に近づいて何かを喋つていて。近くにいるけど、声が小さくて聞き取りにくい。何なんだろう、と思つてみると、痺れを切らしたらしいサラが、影を引っ張つて私の前に押し出した。前に現れたのは、あの人だった。

私は驚いて何も言えなくて、後ろにいるサラを見たけど、サラは私の視線を無視してどこかに言つてしまつた。

(薄情者ついでにこゝにこゝになくなるの一・)

そうだ。彼女は追い詰めるのが好きな人だった、楽しんでいるんだ。

と素直に思つてしまつた。前にいるあの人は、顔も上げず俯せ、何も言わずにただ黙つてゐるだけだ。私も黙つたままだ。とは言つても嫌われてゐるようだから、何も話せないだけで。間が続いてしまつてお互いに黙つたまま、時間が過ぎた。

暫く経ち、いい加減沈黙が嫌になつてしまつた私は、ベットのシーツを取り外し始めた。彼の血や汗のせいですっかり汚れてしまつたシーツを布団から取り外してみると、彼が少し私に近づいて口を開いた。

「…………すまない。」

「えっ？」

「せつかく助けてもらつたといつのに、仇で返してしまつて。」

「あつ…………い、いえ。」

「“仕方がない”と言られて、許されても困るな。……怒つてくれ。
。」

「…………でも、世界を知らなすぎる私が怒つても。」

私の方が悪いのだ。召喚獣たちは、この『世界』の人間に對して抱いている大きな憎悪を私は、理解仕切れていなかつた。サラのような召喚獣もいるといふことが、私が召喚獣に対し一方的に親しげに接したことが間違いだと思う。でも、逆に敵意剥き出しのままで話しかけてもそれは争いへと發展してしまふ可能性がある。難しい、私みたいな子どもが考えても無駄のような話だ。

彼は、何も感じていないような瞳で私を見つめていた。彼の瞳は、綺麗だつた。私は、サラの紅い瞳が一番綺麗と思っていた。しかし、彼の瞳はサラ以上に綺麗だつた。翡翠のような色をしているのに日に当たると実物は見たことはないけど、本の表紙になつていていた海のような青色になる。思わず、見つめてしまふ。でも、あまり見つめすぎると流石に恥ずかしくなり、視線を逸らした。彼は、所謂美形なのだ。美人さんなのです。

人はあまり見たことない私が言つのもどうかと思うけど、彼は今まで1、2位を争うくらいの美人だ。

(ヤバい、今気づいたら私とても恥ずかしいことしてるつー?)

今の私の顔は、凄く変な顔をしているはずだ。もしくは、百面相をしてる。

どうしようと考えていると彼が吹き出した。

驚いて顔を上げてみると、少しお腹を抱えながら、おもいつきりとまでは言わないけど、凄く笑っていた。私は呆然として、笑つている彼を見ていた。笑つている彼も私の視線に気づいたようで、笑いを抑えて私に視線を向き直した。

「いやつ…悪いな。いきなり顔が青くなつたと思つたら、赤くなつたりして随分百面相をしてるな…と思つて、」

「……思わず、笑つてしまつたと。」

「ああ。気を悪くしないでくれ、俺の周りは最近あまりそういう顔をしなくてな。懐かしくなつたんだ。」

彼は懐かしむようで悲しいような複雑な表情をしながら、そう言い
てまた顔を俯せにした。私はただ、戸惑つてしまつだけだった。彼
のことを知らない私が、何を言つても無駄だ。それに『召喚獣』と
いうことがそのことに関係している、と私は思つた。私の世界は、
この人々に畏れられている『樹海』の中だけなのだ。すぐ近くにあ
るといつても『帝都』については何も知らないのだ。

そう、私は知らないのだ。『召喚獣』は酷い扱いをされていると知
つていても、それはどういうことをしているのかを。

顔を俯せていた彼は顔を上げて、私に微笑みかけた。私は、その笑
顔に酷く心が痛んだ。

「せういえば、自己紹介してなかつたな。」

「あ、えつと、私はルナです。さつき一緒にだから知つてますよ
ね、サラとの『樹海』で暮らしています。」

「 そ、う、か。俺は、シノンだ。ヒューレイといつ世界から来た『召喚獸』だ。」

「 …シノン、さんですか？」

「 シノンでいい。さん付けされるのは、柄じゃないからな。」

シノンは、笑つて言つた。

*

帝都、にて
賑わいを見せている通りを一つ外れると暗い道が広がっている。人間は1人も通つていなく、そこが危険だと言われているのが、一目瞭然だつた。これが、賢王とうたわれている皇帝に収められており栄華に輝いているという帝国の闇だ。

その暗い暗闇の中に灯りが灯つてゐる。その光から影が幾つも見える。若い男はナイフを光らせながら、その刃を削り、老人は本の上の指を滑させていた。

その光に入つていきた女が、徐に口を開いた。

「彼はどうなつたの？」

「分からん、生きていると思いたいが。」

「悲観的なこというなよ。ナタリアが怒鳴るぞ。」

若い男はナイフを削りながら、あらか様に嫌そうな顔をした。『ナタリア』という存在が、よほど面倒くさいようだ。そんな男の表情を気にせず、女はふーん、と言つてポケットから袋を出した。袋にはビスケットが入っているようで、女はそれを一枚取り出し、かじつた。灯りは、ただ様子を照らしていた。

「アイツがいなくとも俺たちだけで作戦は実行する。」

「ナタリアが黙っていないよ、イワン。」

「アイツが言つたといえど、するだろナタリアは。」

「……そうだね。」

女は、暗い瞳を灯りに向けた。暖かい光だが、自分たちには酷く痛いようなものだ。まるで、自分たちはこの『世界』の太陽を浴びてはいけない、と諭されているだ。そして、同時に哀れむ存在のことを見つた。彼に対して報われない愛情を抱く存在に。

「ナタリアは、彼のお人形さんだからね。」

辺りは、沈黙しかなかった。

獸と安らぎ

強大な力は、小さな安らぎを奪い去る。

すべてのものを焼き払い、消し去つてしまつ。

この世は弱肉強食の世界だ。力がないものは消え去つていく運命しかない。

そう、力こそがすべて。

力こそが権力の証。

“力こそが正義”

カミュル・ベイグリ・デュレ

(帝国・第1将軍)

彼、シノンを助けてもう1週間ぐらい経つ。急いで仲間の元に帰ろうとしていたように見えた彼は、別にそんな様子もなく、毎日ゆつ

くり治療に専念している。どういう風の吹き回しかは、全然分からぬけど助けたあの日の夜にサラと何かを話していた様子だった。サラ、余計なことを言つてないだろうか。ちょっと不安になつてきました。聞いてみても特に何もない、と2人ともいつので、私は何も言えなくなつてしまつた。

2人は異世界出身同士なので、少しばかり馬が合つようでよく話している様子を見かける。そんな様子を見ている私は、あまりいい気分じゃない。小さい頃から一緒にいた母親的存在のサラをシノンに取られた氣分だ。でも、前にこの感じいくと、私は多分なかなか親離れできないな、と思つて笑つてしまつた。その様子を見ていたサラについに頭が逝つたか、と言われたときは、頭にきてしまつた。お陰で目が覚めてしまつて、何にも思わなくなつた。

今、サラが昼ご飯の支度をしており、シノンにはちょっとばかり果物を取りに行つて貰つてる。私は何をしてるかというと、召喚術の修行中だ。

召喚師は本来一体召喚獣を呼び、一体だけと誓約をするだけである。それに常に誓約している召喚獣をこの世界にいてもらうんだ。でも、呼び留めて元の世界に帰れなくしてしまつ誓約の仕方もある。ある言葉を紡ぐだけで出来るらしいけど、私は教えて貰わなかつた。必要ないだろうし。それによつて留められてしまったのが、シノンたちなのだ。他には召喚獣が喚んだ状態で召喚師が死んでしまつた場合は、自動的に誓約がなくなり、召喚獣は元の世界へと帰るので、じついうことは起こらない。

召喚師と認めて貰うには、召喚獣一体と誓約しなくてはならない。認めてもらつといつても難しいことではなく、ただ単に召喚獣に認めてもらつということだ。召喚術の国と呼ばれている『聖王国』では、周りに試験官いて無理矢理、召喚獣を抑え込んで認めさせたりするらしい。しかし、本来は喚ばれた召喚獣がその術者が自分よりも格下なら、さつさと元の世界に還つたりするらしい。喚ばれた時

は、誓約をしていないので喚んだ術者より強い召喚獣は還ることが出来るらしい。本来は、一番に認めてもらわなくてはならないのは、これから一生のパートナーとなる召喚獣なのだ。でも、いつからかその法則は崩れてしまっている。……何だか嫌な気分になってしまった。

溜め息をつき、周りの森を見渡した。いつものように穏やかな風によつて木々が揺れている。嫌なことがあつたり悲しいことがあると『樹海』の木々たちを私は、見つめる。私は小さい頃から住んでいるから外部の人間が抱く恐怖は一切ない。むしろ懐かしい、暖かい気持ちになる。

ここに来た時は、サラは怖かつたと言つていた。どうして、と私が聞くとサラは笑いながら言つた。何か大きなものに見られているようだからだ、と。小さい私も今の私もそんなことはなかつた。変なのかな私。気を取り直して古びた杖を両手に持ち直した。まず、心を落ち着かして自然と一体になる。

私は不思議なようで、手順をこなしていった。陣も完成し、息を大きく吸い込み、誓いの言葉を言つた。

“我、古の盟約に応じる”と

その瞬間、私の周りの陣は光を放ち、大きな音とともに爆発した。私は、爆風に耐えきれず、身体が飛んだ。転がりながらも受け身を取り、木にぶつかって止まつた。問題の陣は、未だに大きな煙を上げており、止まるることを知らないようだつた。

爆風音に気がついたシノンとサラが、慌てたように私の元にやつてきた。シノンは、私の身体を見て怪我をしていないか、とか優しい言葉をかけてくれながら、身体を起こすのを手伝ってくれた。しかし、サラは怖かつた。美人が怒ると怖いというが、本当にヤバい。腕を組ながら私を見下して、尚且つ額には青筋が見えるようで顔を直視できない。そんなサラと私を見かねてか、シノンは助け舟を出してくれ、今は召喚した召喚獣の様子を見ることにした。

視線を向けるとそこに立っていたのは、子供だつた。子供はキヨロキヨロ辺りを見渡して、どうやら私が召喚した人間だと分かつたらしい、迷わずに私の前までやってきた。煩わしそうな面倒くさそうな視線を私に向けながら、上から下まで見てくる。どうやら、見た感じ女の子のようだつた。

サラとシノンは少し離れて、私たちの様子を伺つていた。まあ、この子に認めてもらわなかつたら私、召喚師になれないしね。2人の心配そうな視線を受けながら、私はただ召喚したこの子を見ていた。暫くすると、彼女は欠伸をして腕を伸ばした。寝起きのようで、機嫌が悪そうだ。

「お前が、喚んだのか？」

「う、うん。私はルナよ。」

「そうか、ルナか。……」

「えつ？」

彼女は、最後に小さく零したようだったが、うまく聞き取ることができなかつた。また私をじつと見つめた後に、ぼそつと零した。誓約をする、と。私が喜んでいる暇もなく、彼女は『エンダ』と名乗つて早々に消えてしまつた。ただ、陣を呆然と見つめている私はサラが肩に手を乗せた。……笑つていて、今の様子がツボだつたようだ。シノンも若干笑つてゐる。そんなに面白いですか、そうですか。

私が拗ねていると分かり、流石に笑うのを止めた2人だけど、肩が震えている。もう、笑うんだつたら盛大に笑つてほしい気分になつた。笑いが収まつたらしいサラは、涙目になつている瞳から流れている涙をふきながら、苦しそうに言つた。

「いや、面白いなつ……やつたな、ルナ。晴れて召喚師になつたぞ。

」

「……取つて付けられた誓めかたなんて嬉しいくないよ。」

「そんな訳じゃないって。それにしても、エンドだっけ？……あの子、強いな。」

笑いが収まつたらしいシノンが、私の頭を撫でながら言った。関係ないかもしれないけど、最近シノンは、私をどう見ても妹扱いしてくれる。そんなに幼いか、私は。

サラはそんなシノンの言葉に同意するよつにそうだな、と言つて急に、真剣な眼差しを私に向けてきた。サラのそんな表情に戸惑いながらも、さつき早々に還つていったエンダを思い出した。銀髪の髪はとても綺麗で、一緒にある紫色の瞳も宝石のようだった。白い肌に白いワンピース、そんな白刃くしの彼女だったが、妙に惹かれるものが沢山あった。

色々謎が謎をよんでも居るような気がたまらないけど、多分絶対そうだと確信できてしまつことが嫌だつた。

*

「どうする気だ、貴様は。」

エンダは、湖に向かって言い放った。しかし何か変化をするわけでもなく、ただ湖は波紋を造るだけだった。そんな様子にエンダは渾れを切らしているようだが、此処にはエンダ以外の存在は見られないようだ。

エンダは舌打ちをして湖を離れた。少し歩くと、そこには湧き水が溢れている場所があった。彼女はそこに近づくと、溢れ出ている湧き水を飲むわけでもなく、ただ水を見つめていた。そこには、ルナによって召喚された『樹海』の入り口の様子があった。つまりなそ

うに見つめていたが、工藤は多分、こいつらに関わらなくてはならないだろうな、と頭の片隅で思っていた。それと同時にあの煩わしい存在を恨んだ。

水面に移されているのは、帝国の将軍だ。かなりの実力者だと、工藤は素直に思った。

『急いで、ここに奴がいる。』

「あの子たちが逃げ切れるかは、私に関わるのか。」

『いいか、逃すな。燃やしても構わん、炙り出せ。』

「罰あたりな」とをする。だが、面白いな。』

『帝国の地位を搖るがることは赦されない。しかし、このまま奴を殺しはしない。』

「……しかしこの女、』

『いいか、生け捕りだ。覚悟はいいな。』

「……“召喚獣”的匂いがするな。」

『 続け！帝国に栄光あれ！！』

暗闇の客人（前書き）

3話一気に更新しました。また暫く、更新しないかもしれません。
誤字脱字があれば、申し訳ないですm(ーー)m

暗闇の客人

どうして、捕まえられたの？

獣は言った。獣の前の影は答えた。

それは、君たちが悪いことをしたからさ。

獣は言った。

僕は、君に何もしてない！

影は、嘲笑った。獣に対して笑った。

君たちは、君たちを信じていた我らの王を裏切ったのに。そんなことをいつのかい？

獣は、困った。身に覚えがないからだ。

そんなことはしていない！

影は、信じられないと首を横に振った。

信じられないな。悪いが君たちには、罰を受けでもうおうか。

影は、腕を振った。そこに、黒い穴が現れた。

ストイ、ル、アルン、ベージュ

“我らに、光は灯る”

酷く寝苦しいかった。いつものように老いぼれの爺どものお小言を言われては、気分が悪くなつた。家の家系を酷く憎んだ。その日は勉強する気も起きなくて、すぐにベットに潜つて目を閉じた。しかし、なかなか寝付くことができなくて、仕方がなく起き上がり、バルコニーへと足を運んだ。

バルコニーに出て、手すりを持ち、都を見渡した。ここは先祖代々守り続けていた美しき都だ。しかし、今では貴族たちにただ食いつぶされている餌に成り下がつてしまつてゐる。先祖が哀れだと思つた。命を懸けて守り続けているはずの都に恩を仇でかえし続けられている様子に。と、同時に自分もこんな汚い都の為に命を投げ捨てるに考へると、怒りに体が震えてしまつた。手を握りしめて、今にも爆発させてしまいそうな怒りをどうにか抑えた。そして、そんな怒りも、哀れなものだと思い、嘲笑つてしまつた。感情的になつた自分に対しても愚かなものだと思つた。

空を見上げると、世界中の人間に平等に光を降り注ぐ月の姿を見た。月は、ただ金色に光り、今の自分の姿を見せつけていくように思えた。

溜め息をつき、頭も冷えだらうと思い、部屋へと足を向けた時だ

つた。

「動くな。」

「……つーなつ…」

「声も出すな、出したら殺す。」

首にナイフが当たった。月の光によって鈍く青く照らされていた。声は、男のものだ。俺よりも少し年上だと思う。男の気配は一切分からなかつた。こう見えて俺は、剣術の心構えを持つており、武人だ。しかし、感じ取れなかつた。相当な手練れだろうと思った、少なくとも俺より数段上だ。俺は男の指示に従い、黙り込み、両手を上げた。俺が抵抗する気はないと分かつた男は、俺の背中を押し

て部屋の中へと入れた。

部屋に入ると男は、バルコニーへと続く扉を閉めた。そして、押されてバランスを崩してしまい、床に座り込む俺の方へとやってきた。何をする気かと思えば、男は被っていた布を外した。

一瞬で、馬鹿だと思った。

敵に顔を見せる密偵がいるかといえば、いいえだ。俺の中ではそれが常識だ。しかし、目の前の男は躊躇うこともなく布を外し、顔を外気に晒した。やはり、顔から見ても男が俺よりも年上だと思った。そして、この『世界』の人間にはない耳が生えていた。

男は、外した布を巻き取り自分の懷へと納めた。座り込む俺に視線を合わせように男は、座った。どうすればいいか分からぬ俺は、ただ視線を向けるだけだ。すると黙っていた男は、口を開いた。

「兄ちゃん、名前は？」

「知つてて来たんじゃないのか？」

「いや、軍部に入り込めば俺はよかつたからな。あんたのことな

んか」れつぽつちも知らねえな。」

男は、少し笑いながら言つた。俺は、ここはただの馬鹿だと思った。

自分よりも腕の立つ將軍や大佐にだつたらどうするんだ、と思つた。
どうやら本当に何も考えてなかつたらしく、これからどうしようか
ねえ、と呟いている。おい、聞こえてるぞ。
敵でまだ会つて間もない俺に、兄ちゃん、お茶くれねえか、と言つ
出す始末だ。

（あ、アホだ。何しに來たんだ。）

俺は、溜め息をついてしまつた。眞面目に答へてこる」とが馬鹿馬
鹿じくて、そんな自分を何だか哀れんでしまつた。

「あ、自分が『前は駄乗るべきだな』俺は、アイクだ。兄ちゃんは？」

「……ローレン・ハフード。」

「へえ、ローレンってこうつだな。俺は、ひょくへら聞きてえ」とが
あつて忍び込んだ。」

「俺が、軍の機密事項を話すと思つか？」

「いや、俺が聞きつけのま違つことだ。軍とは関係ないんだ。」

一体何を聞きたいのか分からぬ。この男、アイクは何を考えてい
るのか。周囲にはいない質なので、益々頭が回らなくなってきた。
アイクはそんな俺の様子を気づいたようでもなく部屋を見ながら、
お前貴族か何かか、呟いていた。……酷く頭が痛くなつてきた、明
日頭痛がきたらこいつのせいにしようとした胸の底で思った。

「あ、俺が聞きたいのは仲間のことさ。」

「仲間、だと？」

「丁度一週間前だ、樹海に召喚獣が入らなかつたか？」

「…………知らんな。」

「前の沈黙は、肯定と取るぜ。ローレン。」

馴れ馴れしい奴だと、思った。それとは逆に自然と普通に話してい
る自分自身に驚いていた。しかし、軍部に関わる話をしないと言つ
たのに、こいつはそれを無視か。何で言つてくれないんだよっ！、
と怒鳴つてくるアイクに哀れみというか馬鹿じやないとかとう視線
を向けた。とてつもなく阿呆だと思った。しかし、勘だけは鋭いよ
うで直ぐに俺が、仲間のことを知つていると分かつたみたいだ。何
だか、複雑すぎる。

答えない俺に憚れを切らしながら、頭をガシガシとかいている。そういうえば、こいつは召喚獣だ。耳があるということはヒューレイの世界の奴だと分かった。報告に聞いていた『反乱軍』は、ヒューレイが中心だった、ということは。

「貴様、反乱軍の者か？」

「いや、ちげえ。関わりがないと言えば嘘だけど、俺は正式に反乱軍加わってねえ。」

「だが、反乱軍と関わりがあるなら、生かして帰すわけには行かない。」

「止めときな、ローレン。お前さんじや、俺を殺せねえ。それにな、」

「……」

「俺たちヒューレイは、仲間、家族を売るようなことはしねえ。お前が、ここで大将を呼んだとして、俺が捕まろうが、仲間のことは絶対言わねえ。」

「それが、俺たちの『捷』だ。だが、反乱軍の若僧どもは分かつちやいね。」

「何がた？」

「あいつらは、捷に背いた。仲間を犠牲にしても軍に喧嘩売る気だろうな。それを俺は見過ごすことが出来ねえ。」

「だから、樹海に入った奴のことを知りたいと言つのか？……無駄だ、あそこは別名『死の森』。生きてかえつてくる筈もない。」

「言つただろう、俺たちは仲間、家族を見捨てねえ。だから、俺は仲間を助けてえんだ。」

「……」

「力を貸してくれ、ローレン。あの馬鹿どもを止めるには、『樹海』に入った奴、シノンが必要なんだ。」

「シノン、というのは、反乱軍のリーダーか？」

「……まあ、そんなもんだ。」

アイクは先程まで見せていたアホ面を無くして、真面目な顔になつた。俺はその顔に畏怖を覚えた。昔の、アイツの顔に重なつたからだ。それは思い出したくない過去に近い。そのせいか酷く、汗をかいた。俺には、到底真似が出来ないものだからだ。

どうして、そんなに一生懸命になれるのかが分からない。しかし、アイクは言つた。仲間を、家族を見捨てる訳にはいかないと。

俺は黙り込み、アイクには顔を見えないように俯せた。しかし、そんなん様子に気にせず俺に視線を向け続ける。

そんな目を向けないでほしい、俺はそんなことをしない人間だからだ。初めて会つたばかりの俺に何故そんなにも信頼しているかのよううに言つてくるのが、分からなかつた。

だが、逆に面白いと思つた。アイクを利用して反乱軍と交渉ができる、こんな醜い都を潰せると思った。俺は、口元を二日月に描いた。言いなりなんかに成り下がるものか、壊してみよつ。

暗闇のなか、月が嘲笑つた。

「少し、そのシノンとこう奴と話してみたいんだ。……いいか？」

「アイク、いいだろ？ 協力してやる。」

「つー本当か！」

「ああ、但し条件がある。それを呑んでくれるなら構わない。」

「何だ、俺が叶えられる範囲なら構わないが？」

お森で庄とでいる凶獣の話（前書き）

サラの視点です。

小話とかではなく、けやんと続きます。

ある森に住んでいる召喚獣の話

この森は、呪われている

昔からこの世界の人間は言っていた。

私は、ただ興味を持った。

私たちを『道具』として召喚した奴らが何故、ここを畏れるのか。

ただ、好奇心に誘われただけだった。

だが、私にも『ここ』が異常なのが分かった。

ここに訪れて、分かつたことがある。

『樹海』は、覆われているのだ。何か、大きな力によつて。何かを
守るかのように。

いつも思つてしまつてゐる。あの子が何かする度に感じてしまう違和感だ。さつきの召喚獣、エンダもそうだ。アイツは、危険だ。動物としての本能が働いてゐる。関わつてしまつと取り返しのつかないことになりそうで。しかし、エンダは何処の世界の奴か分からなかつた。気配は召喚獣なのに雰囲気はこの『世界』の住人と同じ感じだつた。シノンも不信感を抱いていた。匂いは俺たちと同じよつなのに、召喚獣というには変だ、と言つてゐた。ルナは何かあるのか、とも聞いてきたが、私は何も答える事が出来なかつた。

私自身、ルナの出生はよく分からぬ。偶々、だつた。旅をしていて、この森にたどり着く手前の道先に棄てられていたのが、ルナだ。

(あの子には、何かあるのか?)

清々しく気持ちよく朝起きた事とは裏腹に、嫌な予感がしていた。今から1週間前、ルナの召喚術が成功したときは、嘘だと思つた。いくら才能があるといつてもあんな高位な召喚獣が、呼び出すことなど出来ない筈だ。胸騒ぎがしてゐた。自分は間違つた選択をしたのではないか、と。こんな風になつたのは、15年前にルナを拾つたときだつた。

それ以外は、知らない。その当時、帝国は聖王国と争っていた。争いといつても本格的な戦争ではなく、ただ緊迫な状態を保っていただけだ。しかし、その裏で帝国は、聖王国を攻撃するために兵力を増やしていた。多くの男たち、その中の大半は少年だったらしいが、随分と徴兵されていつたらしい。ルナの父親も恐らく徴兵されてしまったのだろう。その状態を両国とも保っていたが、ついに戦争が始まった。しかし、それは帝国と聖王国との戦いではなく、召喚獸たちの反乱だった。珍しくはなかつた反乱だが、そのときは状況が違つた。どうやら、相当強い召喚獸がいたらしく、帝国、聖王国ともに多くの人々が亡くなつた。その中には、ルナの両親もいたのだろう、あの子が捨て子になつたのもこの時期だと思う。もちろん、それ相応に召喚獸たちにも被害があつた。しかし、やはり召喚術を使う召喚師たちの前に召喚獸たちは、負けてしまつた。それからとくに、両国では召喚獸に対する扱いが悪化した。以前よりも人々による迫害も増えてきた。町にもそんなに出歩くことができなくなつてしまつた。

恐らくシノンは、反乱後にやつてきたのだと思う。隨分と人を憎んでいた。反乱以前からも人間に對して憎悪を抱いていた者も多かつたが、どうやらシノンの仲間はその意識が高いような気がした。それと同時に仲間と言つても、「捨て駒」の扱いのようだ。ヒューレイは元々、家族や仲間を大切に扱い、その者たちが危機に陥つたときは助けにいくことが、捷だつたはずだ。しかし、シノンがやってきてもう2週間も経つてゐるが、全くその気配がない。シノンも言つていた、俺のことは誰も助けには來ない、と。そして、仲間たちにはやるべきことを伝えてある、と言つてはいた。腑に落ちないところが多すぎて、何から聞けばいいか一瞬分からなくなつた。

お前はそれでいいのか、森から出た後に仲間のところにそれこそ帰れなくなるんじやないのか、と。色々聞きたいことがあつた。でも、もしこのままシノンが帰つてしまつて悲しむのは誰か、と言えば私は分かる。それくらい、ルナはシノンに惹かれているのが。偶然だ

つた、とこりにはタイミングが良すぎた。

嫌な胸騒ぎは、益々心の奥底で増し続けている。

その夜、森に銃声が響いた。そして、暗い闇の中に対抗するかのように、赤い、赤い、赤い炎が舞い上がっていた。

巡ってきたもの

森は、炎に覆われていた。

動物たちは、熱く痛いその悪魔から必死になつて逃げていた。木々たちは、鈍い音を立てながら、崩れ落ちていく。火の手は、奥へ奥へと導かれていた。それは、もちろん母子のもとにも届いていた。

「・・・・」の炎はつ・・・・！』

「ルナ、早く荷物を詰めな。」

炎の『臭い』がする。鼻が利くサラは、家の外から慌てて戻ってきたときに言つた。ルナは、一瞬何のことか分からなかつた。この『樹海』は、人々は決して火を放つたりしない。それ程恐れられているからだ。しかし、サラの慌てよう驚きながらも本当だということが、今分かつた。森の木々は、焼け落ち、ルナの家は森の随分奥にあるというのにたくさんの動物たちが、こちらに向かつて走つていく姿を見れば、嫌でも分かつてしまつた。

ルナが呆然とする中、サラはまるでこうなることは分かつていたかのように冷静に最低限の荷物を詰めていた。ルナは、益々困惑するばかりでどうすることもできなかつた。それは、状況を見ていたシノンも同じだつた。驚愕に満ちた顔は、何かを考えているようにも

見えた。サラは、そんな二人の様子をため息をつきながら、荷物の袋を閉じた。そして、二人の背中を押した。二人は呆然とした顔でサラを見ていた。サラは、早くしろと言わんとばかりにさっさと玄関に歩いていき、扉を開けて外へ出て行つた。ルナは気がつき、慌ててサラの後ろを追つていった。しかし、玄関を出かけたところで後ろを振り返つた。そこに一向にその場から動こうとしないシノンがいた。ルナはシノンの傍に駆け寄り、その腕を手に取つて引っ張つた。しかし、流石に体格の差があるためか、中々動かない。それに加えて、シノンが動こうとしないこともあって、引っ張ることが出来なかつた。

「シノン、どうしたの？早くしないと森が、」

「……俺のせいだ、俺のせいなんだ。」

「え？」

シノンは何かを呟いたが、ルナには聞こえなかつた。しかし、無表情になり、目を見開いて、その顔にルナは、ただ事ではないと直感的に悟つた。ルナは、シノンの右手を両手で覆うように包み込み、子供を落ち着かせるかのように右手をただ暖めた。

その温もりに落ち着いてきたのか、シノンは我に返つてルナの顔を見てきた。ルナは見つめられたことでどきりとしたが、何とか表情

に出でずに落ち着いてシノンの顔を見ることができた。

「…………いや、何でもない。急げ。」

「えつ…………あ、うん。」

先ほどの様子とは一変し、シノンはルナを正面から見た後、彼女の手を握り締めて扉から出て行つたサラの元へ急いだ。ルナはその変わりよう驚いていた。さつきの様子は何だったのだろうかというぐらい変わつた。何かを呟いていた事も気になるが、今は広がりつつある森の炎から逃げるべきだと思い、そのまま引っ張られていつた。

サラは、来るのが遅いと一言言つて森の奥へと進んでいった。彼女はシノンの変わりようを見ていないので、何も気にして様子もなく迷わずに歩いていった。シノンはルナの手をまた握り返した後、その手を引っ張り、ルナを少し引きずる形でサラの後を追つていった。ルナは何も言わずにただ、歩いていた。家の手前まで炎は迫りつきかけていた。家の周りを見渡すと、逃げ遅れたであろう動物たちの死体が崩れ落ちた木々の下に倒れていた。その姿は痛々しくてルナは目線を逸らした。そして、どうしてこんなことになつてしまつているのかを考えた。この森は人々に恐れられていたものだ。絶対に焼き払うなどといつ罰当たりなことはこの周辺の村、町の人間は考

えない。むしろ、何かお供え物をして供養してくるはずだ。もしかことをするとしたら、そう考えていた矢先、三人の前に1つの影が現れた。影は、だいたい人間の形をしていて、少なくともこの森に住んでいる動物ではない。そうすれば、考えられることは一つだつた。

サラは、瞬時に威嚇した。ここに現れるとすれば、この『樹海』を焼き払った人間しかいないからだ。ルナの手を握っていたシノンの手にも力が入つた。その力の強さにルナは少し顔を顰めたが、それよりもまず目の前の影が気になり、どうでもよくなつた。

しかし、その影は何もするわけでもなくただじつとこちらの様子を伺うかのように見ているようだつた。サラも何なのだ、と言いたげに顔を顰め、その影を睨みつけていた。シノンもだんだんと手を握つていた力を緩めていた。しばらくすると影は何もするわけでもなく、こちらに背を向けて歩き始めた。まるでついて来い、と言つてゐるかのようだ。その様子に一番驚きを見せていたのは、シノンだつた。彼は思つていたのだ。あれは帝国の軍人で、自分を『捕まえ』に来たのだと。しかし、様子外の展開に少しつついていけなくなつたのだ。

怪しむのも馬鹿馬鹿しくなつた三人は、その影を追つかのように歩いていつた。しかし、完全に警戒を緩めたわけではない。この影がもしも人間だとすれば、そう考えたことで嫌な予感しかしなくなつた。影の後を追つてしまらく歩いていると、森の普段使用している反対側の入り口まで差し掛かつていた。入り口付近の辺りでぽんつと音がするかのように影も消えさせていつた。サラは、特に気にするわけでもなくすぐに入り口へ歩いていつた。シノンも後に続こうとしたが、腕に後ろに引っ張られる感覺に襲われた。後ろを向くとルナが、無表情でこちらを見つめていた。シノンは、背筋に悪寒が走つた。しかし、それとは裏腹に彼女はただ、あれは一体なんだつたのだろうか、そっぽんやりと考えていた。慌ててシノンの呼びかけた。それによつて彼女の思考は、戻つてきた。

「ルナ、どうした？ わたしのあの『影』が、何かに見えたのか？」

「え、ううう。そんなことはなくて、何だったのかなって思つて。」

ルナの笑顔の様子にシノンは少し不審そうに目を細めて見つめたが、前方から「急げっ！」というサラの声が聞こえてきたため、ルナは先に行ってしまった。彼はまだその後姿に不信感を抱いていたが、今は逃げるのが先決だと考えて、前に進み出した。

入口はもうすぐだ。

*

作戦は『將軍』が軍議を終えた後、すぐに伝えられた。とは言つても、俺はしがいないただの下っ端と同じような扱いの三等兵士だ。『將軍』から直接伝えれたというわけではなく、俺の隊の隊長から伝えられた。この帝国はだいだい地図で言うと中心からかなり東のほうにある。それよりも少し東に行つた処に今回の任務先の『樹海』だ。俺は少し離れたところに故郷がある。それは『樹海』の方ではなく中心の方に向かつてだ。だから、『樹海』なんてものは俺は初めて目に入れて中に入ることになった。

森に入つていたときから何かが可笑しかつた。それは俺以外の兵士たちも感じていただろう。この森の周辺に住んでいた奴たちは、いくら『將軍』から命令されたとはいえ、森に火を放つのを躊躇つていた。森の呪いは恐ろしいらしく何を特にされるというわけではないが、確かにこの不気味な森に誰も手を出したくはないだろう。それぐらいこの森は、何かが可笑しかつた。

俺は間近で『將軍』を見たことなかつたから、今回近くで見て俺より若くてそれに加え女であること驚いた。そのせいできつと眺め

ていたせいか、隣にいた同じ部隊の奴ににやにやしながら、「なんだ？惚れたのか？」とからかう様に言われた。残念だがそうじゃない、むしろ俺よりお前の方が下心があるぞ。

そう言つてやりたかつたが、前にいた隊長に咎められ謝つている内に作戦決行といわれ、弁解する時間もなく作戦が始まった。

火を放つことで森の動物たちが異変に気づき、森の奥と走つて逃げはじめた。俺たちの部隊を合わせて10ぐらいの隊がある先頭に立つていた『將軍』が、合図を出しそれぞれ部隊は一斉に、火を放ちながら森の奥へと入つていった。

木々が焼き落ちたせいで、森に惑わされることがなくなつていた。通常ここに入るために必要な『加護』があるのだが、あいにくそういうものは俺のような下っ端には配給されていない。そのため、ここに入ることが出来るのは、少なくとも俺の小隊長よりも上の者になる。今回の任務は今噂されている『反乱軍』のリーダーを捕らえるか、もしくは殺すかというようないたつて響きは簡単そうな任務だ。しかし、奴はここに入る前に大佐クラスの兵を何人か殺してここに辿りつた訳で、それに加えてヒューレイの『召喚獣』らしく、装備している剣も通用するかも分からない。察しの通り、俺のよくな下っ端では相手にならないということだ。そのためこの任務の指揮は『將軍』自らしているということだ。そのためこの任務の指示ながら、足を進めていると隊長が止まるように指示をしてきた。どうやら固まつて動いてもこの森は広すぎるため、奴を見つけられない。そのため、危険だがどうやら各自別れて行動することにするらしい。この様子だと、俺たち下っ端は捨て駒にされるようだ。俺は、すぐに思つた。どうやら隊の他の兵士も気づいたらしく、隊長に苦い顔を見せていた。

「各自健闘を祈る。別々に行動してくれ。」

無情だと思った。

しかし、これは命令だ。聞かなくては命令違反でその場で斬り殺される。皆嫌そうな顔をしていたが、各自それぞれ移動をし始めた。俺は、すぐに自分の手前の方に見えていた湖に歩きはじめた。

所詮、これまでか。下つ端の三等兵なんかこのような扱いをされるのが、当たり前だ。俺は別に好きで兵士になつた訳ではなく、ただ寝泊りあり三食食事付き、おまけに兵士というだけで様々な物資を無料にもらえるという魅力的な特典に惹かれて兵士になつた。それでも、俺とは違つて上に昇つて『將軍』とまでは言わないが、大佐や中佐あたりに昇進して国で活躍したいと言つていた同期もいた。そういう奴は自分の能力を向上したりして自力で這い上がつていつた奴もいたが、ここは人間だから上司に賄賂という形で都合よく上

にいつた奴もいた。俺はそんなことを気にもせず、特に努力するわけでもなくいつの間にか入隊して4年も経っていた。俺の同期の3分の1ぐらいは結構な地位についていた。とはいってもまだ、軍では下っ端のほうだが、少なくとも今の俺よりも遙かに上の方へとなっていた。気がついたら俺の同期で俺と同じ三等兵は、10人ぐらいになっていた。何も努力しようとしたなかつたせいでの『召喚獣』に殺されてしまつのかと思うと、笑える話だ。

そんなことを考えながら湖の方へと歩いていると何やら大きな足跡があつた。全体的に不気味さを現していて爪だと思えるところには鋭く尖つていた。これが噂の『召喚獣』のものなのか、瞬時に態勢を整えて剣を構えた。構えるだけでは何だか不安だったので剣を抜き、構えをとりながら辺りをゆっくり見渡して、神経を研ぎ澄ましていた。風が吹き、焼け落ちた木々の葉っぱを飛ばして行った。動物たちも森の奥へと逃れて行つたのか、ここには何もいなかった。しばらく剣を持ち、注意深く見ていたが特に何も変わら様子はなく、それに加えてもし『召喚獣』がいるのならもうすでに俺の首を噛み切つているだろうな、と思った。我ながら先ほどのは素人が分かるぐらい無防備だったからだ。いつまで経つても何も来るようはないので、剣を納めた。この足跡は疑問に残ることが多くあるが、今は任務が先だ。これは後で報告しようと思い、また湖へと足を進めた。

湖にはあつもなくついた。帝国では見ることができないほどの美しい湖だ。これで周辺の木々もあれば最高な場所なんだろうなど暢気なことを考えながら湖の周りをうろつき始めた。俺がここに来たのは、特に何もなく近くにあつたからだ、作戦も何もへつたくりもない。湖の水面は透き通つていて俺の顔を写すだけではなく、頭上高くにある空の雲もその水面に写していた。それをしばらくただじつと見つめていた。

「貴様、そこで何をしていろ。」

「つーーーーあ、申し訳ありませんーーーー！」

じっと見つめていたら、どこから声を掛けられた。言動から考えれば、俺よりも上の地位の奴だ。面倒なことにならないよう俺はすぐ頭を下げる謝った。相手も俺の行動に驚いたかは分からぬが、少し間ができてしまった。しばらく沈黙が続いていたが、相手がため息をつき、「別に頭を下げなくていい、上げる。」といつてきたので、俺は素直に頭を上げた。その瞬間俺は目を見開いていた違う、といつても過言ではないほど驚いた。それもそのはずだ、そこにはいたのは今回の任務で初めて会った『將軍』だったからだ。驚いていて尚且つ口が聞けないという状態に陥っている俺と対称に『將軍』は、とにかく無表情だった。その表情を変えることなく、俺の

隣に並ぶよつな形で近寄って来た。

「おい、そこのお前、私に喧嘩を売つているのか?」

「え、売つてないですが・・・」

「お前ではない。そこにいる『化け物』の方だ。」

てっきり俺が怒られていたと思ったが、どうやら違つたようだつた。という風に解釈している場合ではなかつた。『將軍』は今確か、湖の方を指を指して『化け物』といった。もしかして…

水しぶきを上げながら湖から出て来たのは、でかくてまさに『化け物』だった。しかもこいつには腕があつて、先程見つけた足跡にそつくりだった。というよりそのままだつた。

勘弁してくれ、と思いつつ、こんな奴に食われて消化されて殺されるのは真っ平ごめんなので、剣を構えた。隣にいた『將軍』すでに構え、相手に切りかかっていた。流石は数多くの『將軍』の中で一番剣に長けていると言われている存在だ、化け物の皮膚を切り刻んでいた。

「その奴！！」

「つはい！何でしょうか！？」

「私を援護しろ、コイツを始末する。できるな！！」

「は、はい！－！」

清々しいほどの返事をしたのはいいが、とても困った。援護なんて
しなくとも『將軍』だけで勝てそうだからだ。

やれやれ、本当に俺は運がないのか、自業自得なんだろつか。

これはとある村での出来事。

「どうぞ、これは災厄のものじや。」

「おお、誠でござりますか。大婆様。」

「それは、不味いことになつてゐるのでは・・・」

一人の老女によつて導き出された答えに人々は不安を見せていた。手を合わせてお祈りする者や既に泣き始めている子供をあやしている者もいる。そんな村の人々の様子に老女は少し呆れていた。これは何でも大きすぎるのではないか、と心の底で思つてしまつた。

「安心せい、ここには番人があるじやろうじ。」

「しかし、あやつは・・・」

「いいんじゃ。・・・して、、ティヒラ、よ。」

老女はそこに何ががいることが分かっているかのように村の奥にある暗闇に向かつて話し始めた。しかし、そこから返事は返つてこない。それでも老女は言葉を紡いで言った。

その様子は慣れているのか、村の人々は特に驚いている訳でもなく様子を伺つていた。

「おんし、災厄にあつてみんか。面白いことになるが。」

影は、戸惑つたようにその形を歪めた。

*

「手間をかけさせたな、助かつたぞ。」

「い、いえ。俺は特に何もしてないです。」

だからいい加減、俺の腕を掴むのをやめてください、『將軍』さま。

俺は、心中で思っていた。先程の巨大な湖の化け物は殆ど『將軍』に肩をつけられたといつていよいほど、討伐された。俺も少し援護したのだが、はつきりいつていらなかつたと思われるのは、俺だけではない。討伐し終わつたため、すぐに任務に戻らうとしたのだが、何か気に食わなかつたのかそれとも何かあつたのか、『將軍』は俺の右腕を力強く握りしめた。の方なのに随分とお力がお強いです

ね、と心の中で皮肉つたのは、秘密だ。こんなこといつたら、何されるか分からぬから。

そんなことをしていると、森の方から何やら聞こえてよく聞いてみると、『將軍』を呼ぶ声だ。焼き落ちた木々の間から出てきたのは、今回補佐として来ていたサクリフアイス准将だった。その様子は酷く慌てており、少なくとも補佐には似つかわしいような気がした。サクリフアイス准将はどちらかといえば、戦略を立てる方『参考報』のようなタイプだ。それに加えて准将はいわゆる『七光り』だつた。准将の父親は確か、元將軍。その父親から今の地位にありつけたという話だからもつと笑える。帝国は軍事国家だというのに聖王国のような貴族の生活をしているのだ。そのため見た目は只の小太りのおっさんだ。だから俺の隊長もいつっていたが、あんな人で丈夫なのか、と愚痴を零していたのを聞いた。そんな俺の心境と同じなのか、『將軍』も何だか煩わしいものを見るような蔑むような眼差しを准将に向けていた。

「どうした、准将。何か不備もあつたか？」

「不備どころではありません、將軍！－こんなところで油を売つている場合ではありません！－例の『召喚獣』がこの森から逃げ出したのですよ！－？」

「ほう、それは貴公にまかせたではないか。お前は私におまかせを、奴の首を一捻りしてまいります。といったのはどこのどいつだ？」

「し、しかしそれとこれ、黙れ。」

弁解をしようとした准将に冷たい、冷水のような言葉を『將軍』は降り注いだ。俺は『將軍』の後姿しか見ていないが、前にいる准将の顔を見る限り見ない方が得策だと思った。俺は先程その様子を間近で見て、行動した。恐ろしさを十分に感じている。

『將軍』は掴んでいた俺の右腕から手を離し、准将の方へ近づいて行つた。准将の方は何もするわけでもなく、腰が抜けたのかその場に座り込み、ただ怯えて『將軍』を下から見上げていた。何だかその様子が、よく昔話にあるようなものにある場面に見えるのは、俺だけではないはずだ。こんな緊張する場面で笑いそうになつてゐるのなんて、俺だけだな。そう思い、少し自嘲していた。

そういう俺が考へてゐるうちに『將軍』は、准将の目の前に立つていた。相変わらず恐ろしいオーラを漂わせていた。

「貴様、上官命令違反だ。即刻、補佐を解任する。」

「それでどこに逃げて行った?」

「も、森の向こう側です!!すぐに追いかければ・・・」

「お前はここで腰を向かしているから私が変わりに追いかけると?
笑わせるな。貴様の失態だ。貴様がいけ。」

「しかし、相手は大佐クラスを殺しているのですよー?返り討ちに
あうのが、目に分かります!!!」

「おや、お前は准将ではなかつたか?どうともなるだらう、行け。」

「です「黙れ、痴れ者が。」・・・・・つ――」

「なつ・・・・・！」

「変わりといつては何だか、」

ちよ、何だ。『將軍』さま、何で俺を見るんですか。

今まで劇的な有様をただ傍観者としてみていたのだが、何だか雲行きが怪しくなつて来た。不味い、今更出世街道なんて昇りたくないです、止めてください。上官に准将が逆らつた地点では、まあ仕方がないなと思つていたが、その後の『將軍』の行動が非常に不味いと思われる。

俺にすつごく視線を向けて来る2人。1つは、嫉妬のような業火に焼き殺されそうな視線だ、非常に有難くない。そして、もう1つは・

「三等兵、貴様が変わりに補佐しない。」の私

ユ・ペネット『』のな。

「えつ・・・・・?」

俺はこの時相当なマヌケ顔だったことを直感とこりよりも確信してしまった。

・・・・・やはり俺、自業自得なのか?

サラは現状に困っていた森を向けて危機を脱することが出来た。しかし、これからが問題だった。いくら逃げ切ったとはいえ、まだ森の中には火を放った連中がわんさか居るはずだ。そして、この森の奥までやってきている奴もいるかもしれない。簡単にはいかないだろう。どうしたものかと考える。それに加えて、若い一人も様子がおかしい。……何だ、この頭が痛くなる状況は。

ルナは様子が変だ。何かあったのか、と疑うくらいにだ。シノンは……言うまでもなく、ここに来たときに連中と何かがあつたのだろう。奴らが身につけていたのは、対召喚獣用の、しかもシノンに効くものばかりだった。狩りに来られていたな、これは。

相変わらず悪趣味な連中だな、と思った。そんなことは変わる訳ないか、と考えを終わらせたサラは何時までも此処にいるわけにはいかないと思い、顔を伏せているルナとその傍にいるシノンに近づいた。

とりあえず移動するぞ、と2人声をかけ、サラは荷物を背負った。ルナは立ち上がる元気もないようで、シノンに支えられながら、漸く立った。サラはそんな様子にため息を尽きたくなつて氣だが、いきなり故郷を奪われたものだからな、と思つた後、随分自分自身が

あまり傷ついていないことに笑ってしまった。

(奪われる事も慣れたってことか、)

随分薄情になってしまったな、と感じながら、2人を見た後に先頭で歩き出した。

森の反対側に出たことはなかつたが、少なくとも3つの集落があることを覚えている。しかし、昔の話なので今も現存しているかということは定かではない。宛もなく歩くよりはまだいいかと思いつながら、サラは歩いた。

「サラ、どこに向かつてるんだ?」

「反対側にはあまり来たことはないんだが、少なくとも3つの集落があつたのを覚えている。その1つ向かつてる。」

「追つ手がすぐ来るんじゃないか?……奴らだつてそれぐらい把握してるはずだ。」

「そりだうな。でも安心しろ、その集落は少しの間なら安全さ。

「…………何か”いるのか?」

「“小さな番人”さんが、いるだけさ。」

召喚師と魔王の王?

あれから2人は誓約を結びました。

召喚師の青年は、王と共に魔王の手下たちを倒していくました。

2人の活躍に人々は、英雄だと褒め称えました。

そのことを耳にした者たちの中には2人の仲間になつていいく者が出てきました。

それから、数多くの仲間たちが増えていきました。

2人は、仲間たちと助け合いながら、魔王の手下たちを益々倒していました。

一方、魔王の方はこの様子にただ笑っているだけでした。

笑い声が魔王の城に響き渡り、不気味さを増していました。

しかし、この有り様に何時までも暢氣にしている場合ではない、と思つた魔王は、ある一つの国を報復として襲いました。

その国は、一晩にして滅びてしましました。

そのことにより、人々は魔王に対し再び恐怖を覚え、青年と仲間たちを追い払つてしましました。

青年は、その様子に臆することはありませんでした。

何と滅びた国にいた魔王たちを王と共に戦いに行つたのです。

そして、ついに魔王たちを追い払つことができました。

再び、平和を取り戻した国には民はおらず、いたのは1人の美しい姫でした。

青年は一目でその美しい姫に恋に落ちました。

その美しい姫の名は

麗しの貴婦人

「……………」
「……………」

「…………… も、それはアンモビウムといつ花でござります。」

大きな城、孤高に聳えている頑丈な城壁、華やかな庭、そんな中に『わたくし』はいた。

『わたくし』は、いつも夢でこの光景を何度も見ていた。『わたくし』は、ある姫様に仕えているようで、何度も姫様の疑問にお答えしていた。姫様、といつても顔を見たことが一切なく、それに加え、ここでの『わたくし』の名前も違うようで、何かに遮られるかのようにいつも名前を聞きとることができない。何もわからない状態ですが、それでも姫様がとても美しい方だと、『わたくし』は心の底から思つた。

前は、空の色、この前は海のことと姫様は全くと言つていいほど、外について何も知らなかつた。

こここの王様は過保護なのかしら、と疑問に感じたが、『わたくし』はここ以外の場面は見たことがないから何も言えなかつた。

そして、今回へと至る。今回は、庭先に咲いている花に興味をそそられた』様子だった。

姫様は『わたくし』が答えた花の名前を何度も繰り返して言つていた。

「……………」のアンモビウムの花言葉は句といつの？

「・・・『不变の誓い』といった花言葉が『J』ぞこます。」

「『不变の誓い』・・・」

姫様は花言葉を何度も呟いていた。何か変な事でも言つたかしら、と『わたくし』は首を傾げながら思つたが、姫様は特に気にされたご様子もなく、ただ呟いているだけだった。しかし、それを長い間・・・といつても数分間だけですが、そうなさつてらつしゃると段々困つてきました。呟いている姫様をどうしようかと思いましたわ。そんな『わたくし』の苦悩を知つてか知らずか、姫様はいきなりこちらをお向ぎになられました。その行動に驚いていた『わたくし』に益々近づいて来る姫様。いつもよりも距離が短いのにそれでも姫様のお顔は見ることができない。何かに、阻まれているような気がして・・・

考え方をしているせいか、姫様の言葉が聞こえない・・・?おかしい、それでも話は聞けるはずだ。

『何』か・・・いる?

「残念。もうすこしだったのに。」

「つーーん？」

女の声が聞こえた。それは目の前にいる姫様の声ではない。女は笑つていて、あざ笑つている。

笑い声と共に『わたくし』は目が覚めた。

「・・・さま・・・ネーヴェ様！！」

「…………ア……ウルム？」

「はい、大丈夫ですか？隨分と躊躇されていましたよ。」

「ええ・・・大丈夫。」

「・・・やはり、例の『夢』ですか？」

「・・・・・・」

そう、私はあの『夢』を見てから何かが変わった。

私は、もともと聖王都の下級貴族の末子だった。あくまでそれは8歳のときのこと。

最初はただの夢だった。御伽噺の延長戦だと思っていた、友達に話して楽しそうにしていた。両親にも話した。お母様もお父様も笑つて下さった、面白い話だと。しかし、その場に居たお祖父様は違っていた。お祖父様は・・・いえ、あの男はすぐにそれを知り合いの歴史家に話したらしい。そして、話を聞いた歴史家は興奮しながら、私の家へやって來た。そして、目を輝して話し始めた。

「君は、もしかしたら例の『姫』に仕えていた天使の生まれ変わりかもしない！！」

興奮した歴史家は私の肩を掴みながら、「続きを話してくれないか！？もしかしたら、何か分かるかもしない、あの『暗黒期』について！…」といった。

『暗黒期』　　それは御伽噺の召喚師と異世界の王様の話にあつた言葉だ。人間が弱く、魔王たちによつて奴隸にされていた時のことを指している。事実だつたらしいが、その召喚師と王様をその後に見た者はないに等しく、存在を今は疑われている。彼が言つている『姫』というのは、その話に登場する人物なのか、と思った。それなら一人しかいない。『姫』の名は・・・・・

「『アラリトウム』・・・世界から何一つ残さずに消えた姫君。」

何一つ残つていないので、彼女は、彼女の出身である国のことその素性も何もかも残つていない。しかし、御伽噺だけに出て来る召喚師が愛した女として。

御伽噺には彼女には仕えていた天使がいたらしい。人間が弱かつたという時代には、珍しい光景だったはずだ。その天使は彼女が死ぬまで仕えていたという話だった。でも、安易に考えすぎではないかと歴史家を見た。相変わらず歴史家の男・・・ええい、長ったらしいわ。男は、キラキラ瞳を輝かせながら見ている。いやらしい目つきだわ、虫唾が走つてしまつわ。

それからだった、私の屋敷に数多くの歴史家たちが訪れ、私を『麗しの貴婦人』と呼び始めた。この呼び名はその天使がそう呼ばれていたという理由だけでつけられたもの。・・・嫌味つたらしい、馬鹿にしてるわ。そして同時に毎日監視されるようになつた。

友人たちと遊ぶときも学業に励んでいるときも、屋敷の庭で午後のお茶をしているときもだ。うんざりだった。しまいには、聖王国きての歴史好きとうたわらわれていてる屁理屈王子に捕まつたのが、運のつきだつたわ、本当に。

「急ぎましょ、ネーヴェ様。『例』の村はこの先です。」

「そうですね。追っ手が来る前に行かないと、あの馬鹿王子と結婚させられてしまつわ。」

それだけは、断固拒否したい。勘弁して欲しいわ。
私が、旅に出ている理由? もう、わかるでしょう。

結婚なんて人生の墓場でしかないのよ、私にとって。

『麗しの貴婦人』?

虫唾が走るわ、所詮みんな天使のことしかいつてないじゃない。

私は、『ネーヴェ』でしかないのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9267/>

約束と滅びの予言

2011年2月22日07時04分発行